



●●●● 少女雑誌の部屋から ●●●●

今月号では『女学生の友』を特集いたします。もともと、女子中学生を対象にして創刊された少女雑誌でしたが、徐々に路線を変更し、ファッション、アイドル、漫画などの多彩な情報を取り扱うようになっていきました。当初、戦後の第1次ベビーブーム世代(昭和22~24年)の方たちが読んでいたので、成長に伴い雑誌の売上げが低迷していく中、生き残りを図るため時流に乗って柔軟に対応した結果なのでしょうね。表紙を見比べてみるだけでも明らかに印象が違います。懐かしいと感じる方も多いかもしれませんが、全く馴染みのない若い世代の方たちは、おばあちゃん世代の方に話を聞いてみてはいかがでしょうか。

女学生の友

小学館

創刊当初は女子中学生を読者対象としており、小説を中心に学習ページも設けられた教養雑誌だったが、徐々にアイドルのグラビア特集などが増加し、対象年齢の引き上げがはかられた。昭和40年頃よりジュニア小説が主流となり、別冊版・デラックス版も創刊された。昭和42(1967)年1月、『ジュニア文芸』(『別冊女学生の友』の改題)の創刊とともに、小説中心の教育雑誌としての性格は次第に薄れていき、“おしゃれとアイドルのティーン雑誌”と銘打つジュニアファッション情報誌へと変わっていった。昭和50年1月号より『Jotomo』に改題。終刊後の後継誌は『プチセブン』。(創刊 昭和25年4月号~終刊 昭和52年12月号)

『女学生の友』で活躍した主な挿絵画家

かつやま

勝山 ひろし (1922-2004)

京都市生まれ。京都市立美術工芸学校・絵画科卒業。昭和20年代末~30年代初頭にかけて、「絵物語」と呼ばれる、小説と漫画の中間にあたるような形態の作品で人気を博した。『女学生の友』をはじめとし、多くの少女雑誌で絵物語ほか、挿絵や口絵を描いた。昭和30年前後は勝山ひろしの名前が掲載されない雑誌はないほどの人気ぶりだった。

藤田 ミラノ (?)

書家・藤田讃陽の長女として香川県に生まれる。昭和23年、多摩美術大学日本画科に入学し、在学中から創画会や日展に入選。卒業後は武蔵野美術大学彫刻研究科へ進む。昭和28年から『女学生の友』に挿絵を描き始め、人気画家となる。昭和34年パリへ自費留学。昭和37年に帰国後は、コバルトブックスや『ジュニア文芸』の表紙絵等を描く。

サロン TOMO

全国各地の読者が投稿するページ「サロン TOMO」には雑誌の感想やイラスト、相談事などが寄せられていました。

T子! この手紙ボツにしたら、チョコレートとクリームをべたべたにぬりつけて食べちゃうぞ! フッフ
あらためて、私、まり子です。今まで他の本をとっていたんですけど、ダンゼン女友のファンになりました。
皆さん、よろしく。

福島県に住む少女からの手紙 (昭和31年1月号)

(前略) 私は、カレンダーを新しく買って勉強机の前にはり、毎月九日に赤えんぴつで印をし、その日を目当てに勉強することにしたの。九日までの勉強の進行状況がわかる上に、九日には待ちに待った『女学生の友』が見れるんですもの。とても楽しいわ。いわく、『楽しみは忘れたころにやってくる』フッフ。(中略) カレンダーの両わきには、自分の大好きな映画スターのプロマイドをはることもお忘れなく。私は水木襄さんと千葉真一さんのをはりましたの。では、またね。バーイバイ。

熊本県に住む少女からの手紙 (昭和36年5月号)